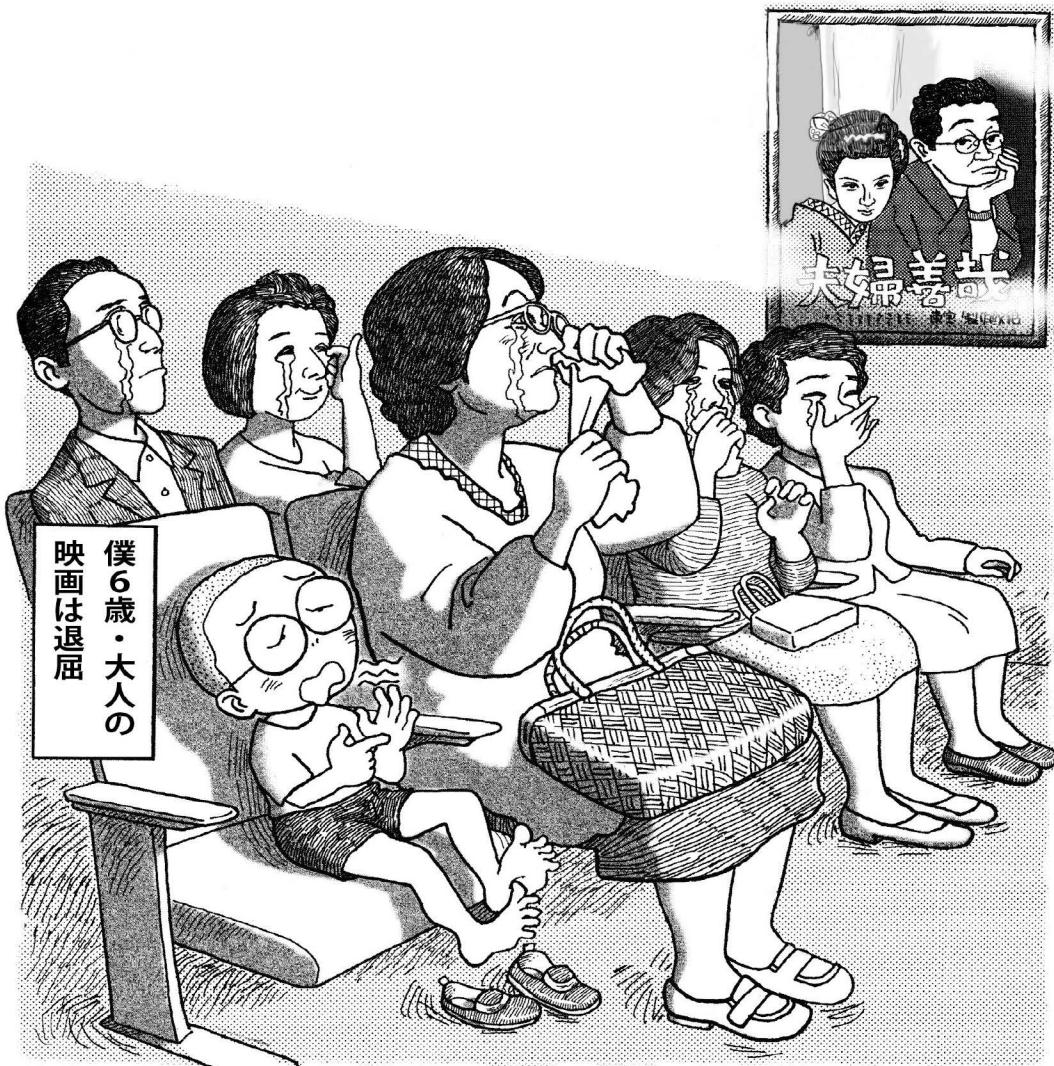


東成区の昭和 やぶにらみ日記



絵と文・柳たかを

我が映画観賞黄金時代



※ 珍しく母が映画に誘ってくれたが、森重久弥と淡島千景の「夫婦善哉」、六歳には無理だった

昭和30年代(1955年~1964年)、僕の故郷東成区今里は東西南北から5本の道路が集まり、信号機が未発達の頃には車は交差点に進入すると円を描くように交差点を回りながら、進みたい方向の道路に分かれて行く方式だったため、今里ロータリーと呼ばれました。

記録によれば、昭和30年に信号機がつけられロータリー方式はなくなりましたが、幼少時に見た独特な交差点の光景が記憶に残っています。

そして交差点をなんばから生駒方面に横断する千日前通りに入り口があり南方向へのびる新橋通商店街には、東映・大映・松竹・日活の系列映画館がありました。

特にロータリー交差点にあつた堂々たる東宝映画館でギュウギュウの人混みの隙間からかろうじて立ち見て見た「ゴジラの逆襲」(同2作目・1955年)、その迫力には本当に興奮しました。

今里ロータリー北方向緑橋方面には洋画系のロマン座があり、5~6歳だった私は父親に連れられ、カーク・ダグラス主演の「ユリシーズ」(1955年3月公開)を見ていました。(誰も成功しない強弓の弓幹(ゆがら)に弦(つる)をヒヨイッとかけてしまう英雄の物語)。

さらに今里ロータリーから1.5km南の猪飼野にあったパレス座では、喜劇王チャップリンが繰り出すノンストップのパンтомimeギャグに悲鳴のような笑い声と涙とハナでもう無茶苦茶、笑いすぎて息ができない苦しさをはじめて味わいました。

そういうえば、当時の映画館では、たとえば2本立ての場合、上映の合間に内外の主な出来事や政治ニュース・スポーツ・芸能ニュースが小気味よいアナウンサーの声とともに流されていた。

誰もが月に1~2回は映画館に通っていた時代で、映画観賞は當時まだ存在しなかった週刊誌のように世の中の動向を目と耳で知ることができる唯一の情報施設でもありました。

やふにらみ日記 (473) 東成区の昭和

(15) 写生

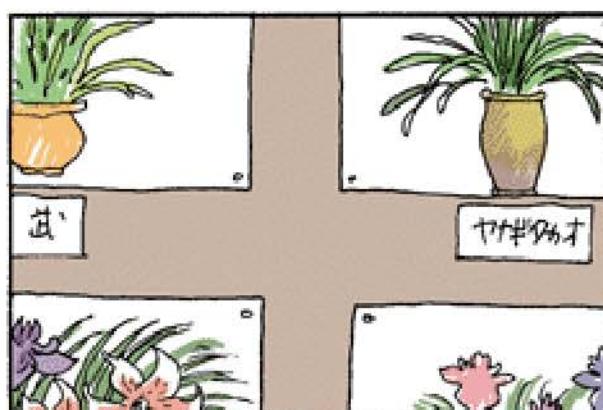


やふにらみ日記 (474) 東成区の昭和

(16) 写生



やふにらみ日記 (475)
東成区の招和
 (17) 写生



やふにらみ日記 (476)
東成区の招和
 (18) 写生



やふにらみ日記 (477)
東成区の昭和
 (19) 写生



やふにらみ日記 (478)
東成区の昭和
 (20) 写生



東成区の昭和

(21) 写生



東成区の昭和

(22) 写生



やぶにらみ日記 (481)
東成の昭和
 (23) 写生



やぶにらみ日記 (482)
東成の昭和
 (24) 写生



やふにらみ日記 (483)
東京の昭和

(25) 写生



やふにらみ日記 (484)
東京の昭和

(26) 写生



東成の冒和

(27) 写生



東成の冒和

(28) 写生

